

研究題目	近代日本における語り芸の「大衆化」—説教源氏節を事例に	報告書作成者	藺田 郁
研究従事者	藺田 郁		
(研究背景)	<p>近代日本の大衆的な語り芸を代表するものに浪花節(浪曲)がある。大道芸として始まった浪花節は、明治中頃から後半にかけて寄席を中心に盛んに演じられていたが、しだいに人気を集め、明治末には大劇場でも演じられるようになっていく。こうした浪花節の研究は、これまで兵藤裕己(兵藤:2000)らによって少なからず取り上げられてきた。一方、浪花節の成立には、関連する様々な大衆的な芸能が大きく関わっており、近代における大衆的な語り芸の拡がりや展開を明らかにするためには、浪花節周辺の芸能・音楽についての研究が不可欠である。説教源氏節はそうしたものの一つであるが、これまでは関山和夫などが断片的に扱っているものの(関山:1986)、その全体像は未だ捉えられていない。</p> <p>・兵藤裕己『声の国民国家・日本』日本放送協会出版、2000年      ・関山和夫『説教と話芸』青蛙社、1986年</p>		
研究目的	<p>上記の問題背景を踏まえ、本研究は明治中ごろから明治末にかけて、東海地方を中心としながら、全国的な規模でも盛んに演じられた大衆的な語り芸の一つ、説教源氏節を取り上げた。この芸能は実際的な活動時期が短く、ほぼ明治時代のみであるにもかかわらず、名古屋・東海地方を中心に全国展開しつつ、隆盛時は一時東京で頻繁に上演されており、近代日本における大衆的な文化事象を考える上で恰好の材料といえる。したがって本研究は、説教源氏節を近代の大衆的な語り物芸史に位置づけるために、説教源氏節の音楽形式および上演活動を調査・考察することを目的とする。</p> <p>新内節の語り手であった岡本美根太夫によって創始された説教源氏節は、一方で近世の語り芸である新内節を端緒としながら、他方で説教祭文を新たな軸に据えており、その上演形式は浪花節(浪曲)とも少なからず共通している部分をもつ。また説教源氏節が熱狂的な支持とともに、幅広い階層に拡がっていく「大衆化」の過程は、その後圧倒的な人気を獲得する浪花節(浪曲)の状況とも類似する。本研究では、こうした点を念頭におき、説教源氏節を近代の大衆的な語り物芸史に位置づけることで、近代日本における芸能音楽からみた大衆的な文化生成の一端を解明することに繋がりたいと考えている。</p>		

研究内容	<p>説教源氏節は、江戸末期に岡本美根太夫によって大阪で創始され、その後明治初めに活動の拠点を名古屋に移すと、興行が盛んに行われるようになった。明治の二十年代後半ごろ、源氏節女芝居が登場すると、興行活動は名古屋・東海地方から、さらに全国へと拡がり、最終的には東京にも及んだ。先行研究では、源氏節女芝居が過激な演出によって東京で熱狂的に受け入れられたことが言及されているが、その他の地域では、そのような演出形式ばかりで上演されていたわけではない。そこで本研究では以下の二つの作業を通じて、先行研究で言及されてきたものとは異なる、説教源氏節の「大衆的」な特徴を明らかにすることを試みた。</p> <p>①まずこれまで十分に把握されてこなかった東海地方の活動分布状況の解明をめざし、東海地方の説教源氏節に関わる情報を各地域の郷土史資料・新聞などから収集・整理して、説教源氏節が地域・階層を問わず広く親しまれていた実態を調査した。</p> <p>②これまで取り上げられなかった音楽的側面を分析することで、語りのなかに過激な演出へ結びつく要素がある一方、より親しみやすく解り易い部分が見出せることを明らかにした。</p> <p>説教源氏節の具体的な興行活動を明らかにするにあたって実施した内容は、説経源氏節がどの場所で、どれくらいの頻度で上演されていたか、という興行的な側面に関わる情報だけではなく、実際にどのような人達に、どのように親しまれ、どのように受け入れられていたか、ということである。そのために、東海地方に残された明治期の新聞や郷土資料のなかから、説教源氏節に関わる情報のうち、特に説教源氏節を聞くだけではなく、多くの人が演じて、語っていた状況を見つけ出すことに調査の重点を置いた。</p> <p>上演形式については、これまでの説教源氏節は芝居の面から触れられることが多く、音楽的な面からの検討は十分ではなかった。そこで説教源氏節の音源もしくは映像の分析・考察のために、説教源氏節が伝承されている広島廿日市市で調査を行い、その映像音源を収集するとともに、本研究課題を実施する以前に行った調査を通じて収集した音源(名古屋の甚目寺人形に残された説教源氏節など)との比較分析を行った。この分析考察を通じて、説教源氏節の語り芸としての基本的な音楽構造を明らかにして、音楽形式のなかにより馴染みやすく、語り易い表現方法が用いられていることを見出した。</p>
------	--

研究のポイント	<p>説経源氏節が活動した近代日本において、語り芸は一方で大衆芸能として圧倒的な人気を獲得した浪花節が成立し、他方で芝居や映画、レコードなど極めて広範囲のジャンルと関わりを持っており、近代の大衆文化に欠かすことのできない存在であった。したがって本研究の成果は、語り芸というジャンルにとどまらず、近代日本における大衆文化全体についての解明を進めるものであると考えている。そのなかで特に説教源氏節において注目するのは、説教源氏節の具体的な広がり方とその受容のあり方である。説教源氏節の人気は短期間で急速に広がっており、「大衆化」の特徴的な事象として捉えられる。したがって本研究のポイントは、そうした説教源氏節のあり方を明らかにして、近代日本の語り芸における「大衆化」の具体的な素材を提示することであると考える。</p>
研究結果	<p>現地調査を行った東海地域において、説教源氏節の興行活動に関する具体的状況が把握できた。また、断片的であるが、東海地方以外の地域についても具体的な状況を把握できた。愛知県においては名古屋のほか、名古屋周辺の岡崎や豊橋、多治見など各地域の説教源氏節についての興行状況の一部が明らかになった。これらの状況を整理するなかで、明治中頃から明治末までの興行活動の推移を辿ることができ、説教源氏節が名古屋・東海地域を中心としながら、全国へ展開している具体的な動きが見出せた。また愛知県以外では、特に静岡県において、新聞記事データベースにより、説教源氏節受容についての具体的なあり方が見出せた。説教源氏節の聴衆が単なる芝居観劇にとどまらず、自らも語り、演じる人々が多かったことが明らかとなり、それらは語り方を示した唄本の頒布などを裏付けるものとなった(下頁、参考資料)。これらに関する研究成果の詳細は、「明治中後期における源氏節の興行活動の広がりとそのあり方—東海地方を軸に」『日本伝統音楽研究』第14号、日本伝統音楽研究センター)に掲載される予定である(2018年8月)。</p>
今後の課題	<p>本研究は、説教源氏節の具体的な興行活動について東海地方を主な対象として調査考察した。しかし、関連する調査のなかで説教源氏節の興行活動が極めて広範囲に広がっており、その他の地域においても、より具体的な活動範囲の把握が可能であると感じられた。その点は今回の調査では不十分であったため、今後各地で再調査が必要であると考えている。</p> <p>一方、説教源氏節受容のあり方については、新聞記事などからその一端が明らかとなったが、調査地域における現在の担い手から説教源氏節の習得について聞き取りが十分に行えなかった。また、上演形式の比較については、一部収集しただけにとどまり、音源を通じた比較考察が十分に出来なかった。これらは収集した台本資料を参照しながら、改めて詳細に分析考察を進めていく必要があると考えている。</p>

